

日本中國學會報 第75集
2023年10月7日 発行 抜刷

上古中国語のモダリティ助詞「矣」について

大西克也

上古中国語のモダリティ助詞「矣」について

大西克也

1. はじめに

上古中国語の文末助詞「矣」の文法機能、また「也」のそれとの差異の解明は、上古中国語文法における難問の一つである。『論語』に出てくる最初の用例を、金谷 1963 の訳とともに引いてみよう。

(1) 有子曰：「其爲人也孝弟而好犯上者，鮮矣。不好犯上，而好作亂者，未之有也。
(『論語』学而 1-2B)
(1)

有子がいわれた、「そのひとがらが孝行悌順でありながら、目上にさからうことをこのむようなものは、ほとんど無い。目上にさからうことを好まないのに、乱れを起こすことを好むようなものは、めったに無い。」(金谷 1963:18)

「鮮矣」の訳は「ほとんど無い」、「未之有也」の訳は「めったに無い」である。似たような意味なのに、なぜ有子は異なる助詞を使ったのか、どのような基準でこの二つの助詞をつかいていたのか、異なる助詞によって何を伝えようとしたのだろうか。付された訳だけからは伺い知ることはできない。

しかし上古の人々は、この二つの助詞の意味合いは大きく異なると認識していた。『淮南子』説林訓に「也と矣とは相去ること千里」という。原文は次の通りである。

(2) 扶之與提，謝之與讓，故〈得〉之與先〈失〉，諾之與已，也之與矣，相去千里。
(『淮南子』説林訓)
(2)

「也」と「矣」との違いは、「扶」(支える)と「提」(投げつける)と、「謝」(謝る)と「讓」(責める)と、「得」(得る)と「失」(失う)と、「諾」(許諾する)と「已」(拒絶する)と同様、千里に例えられるほど大きく異なるというのが、当時の感覚であった。「也已矣」という異物の組合せは、曹銀晶 2016:126-128 によれば定州漢簡『論語』には存在しない。

本稿は、両者の差異を正確に捉えるため、まず「矣」についての先行研究の問題点を整理した上で、「矣」の持つモダリティ機能について初歩的な見込みを提示しようとするものである。資料は『論語』『孟子』『左伝』の全用例による。例文には、他者の視線による検証の意図もあり、原則として小倉 1988-1989 (『左伝』)、金谷 1963 (『論語』)、小林 1972 (『孟子』) の訳文を付すこととした。

2. 研究概況

2.1 「矣」と現代中国語の「了」

清末以前の諸説は割愛する。我々の「矣」に対する理解に最も大きな影響を与えたのは『馬氏文通』であろう。馬建忠 1898/1983:341 は「矣」の働きについて、「出来事や道理が既にそうになっているという語気を表す」と説明する。そしてこのような「矣」の已然の語気は、「俗語では『了』に相当し、『矣』のフレーズやセンテンスを助ける働きは、全て『了』で説明することができる」と言う。「全て」というのは誇張気味であるにせよ、「矣」が現代語の文末助詞「了」に相当するという説は、呂叔湘、王力といった大家の著作を経て、今に至るまで継承されて行く。古代語の機能語の辞典として定評のある『古代漢語虚詞詞典』の「矣」に関する第一項は次のような説明である。「(一) 已然の語気を助ける。(A) ある出来事や状況が既に出現、形成済みであること、あるいはある動作が既に完成、実現済みであることを表す。文中で『既』『已』等の副詞と組合わさることもある。『了』と訳すことができる。」⁽⁴⁾ 実際「矣」は「了」と訳されることが非常に多い。二つ例を挙げる。

(3) 孔子對曰：「有顔回者好學，不幸短命死矣。」(『論語』先進 11-2B)

(4) 有一個叫顔回的用功，不幸短命死了，(楊伯峻 1980:111)

顔回という者が勤勉でしたが、不幸にして短命で死にました。

(5) 天下之無道也久矣，(『論語』八佾 3-14A)

(6) 天下黑暗日子也長久了，(楊伯峻 1980:33)

世の中暗い日も長い。

近年の日本の著作では宮本・松江 2019:98-100 が、「(ア) 行為・変化の実現(或いは実現への気づき)を強調する。最も典型的な用例は、動態的事態を表す述語に付加され、行為・変化の実現を強調するものである。……(イ) 性質・状態の確認・肯定を表す。この用法においては、多くは述語が形容詞句である。」と述べる。(ア)に該当するのが例(3)、(イ)に該当するのが例(5)である。ここからも「矣」と「了」との関係が見て取れる。

2.2 「矣」と完了相

このような「矣」と「了」との類似性を踏まえて、「矣」が表すのは「了」と同じく「完了相」(perfect aspect)であると主張したのが、プーリーブランク(Pulleyblank1994、Pulleyblank1995)である。議論の前提として、少し長くなるがPulleyblank1994:321-322の完了相と「了」⁽⁶⁾についての説明を引用しておく。

(7) Li, Thompson and Thompson 1982 は、「了」⁽⁷⁾が(完結相とは対照的に)完了相マーカーとして機能していることを提起している。つまりロシア語の完結相や古代ギリシャ語のアオリストのように、単純にある動作を完結した分割されない全体として見るのではなく、古代ギリシャ語や英語の完了時制のように、動作の完結を発話時もしくはある別の参照時に関連付けるのである。Chao は「現時点で完結し

た動作」を「了」の意味の一つに含めている。Li and Thompson が「了」の意味の下位範疇として最初に挙げた「状態変化」は、現代中国語の学校文法における定義としてよく見られるものであるが、Chao が最初に挙げた起動相と同様に、完了相の概念に容易にあてはめることができる。どちらにおいても、先行する状況の完結によって生じた新たな状況に焦点が当たっている⁽⁸⁾。

簡単に言うと、完結相 (perfective aspect) が動作を外部から全体として捉えるのに対し、完了相は動作の時間を発話時等の参照時と関連付けて捉える。言い換えれば、完了相は2つの時間を結びつける視点を持っている。上で引いた例で説明すると、例(3)では顔回が死んだのは過去のことだが、「死矣」は顔回の死を好学の弟子を問われた現在に結び付け、「今ではもう死んでしまっている」と表現したと解釈される。例(5)は天下が「無道」という状態になってから、発話時現在までを「久矣」と表現しており、2つの時間が組み込まれていると解釈される。ここでは完了相説が「矣」の実例と一定の親和性を持っていることをとりあえず確認しておきたい。

プーリーブランクの完了相説が反響を呼んだのは、アスペクトという公認の文法範疇に「矣」を位置づけ、一般性の高い説明を試みたからであろう。完了相についての言語学的知見を動員して、用例の意味を整合的に説明する作業を通じて、「矣」の機能の推定が可能になったのである。実際、プーリーブランクの説を修正・補強する立場から、劉承慧 2007、鄭路 2013、梅廣 2015、洪波 2015、姚堯 2015、山田 2016、陳前瑞・王繼紅 2018、洪波・王雪燕 2021 等本格的な論著が書かれている。否定や疑問を呈するものも若干あるが、本格的な反論は見たことがない。

ここで、冒頭で掲げた⁽¹⁰⁾「矣」の用例を振り返ってみよう。

(7) 有子曰：「其爲人也孝弟而好犯上者，鮮矣。(『論語』学而)

この「鮮矣」は、一般的な事象として「そういう人は少ない」と主張しているのであり、過去のどこかで少なくなり、それを発話時に関連付けるという完了相的な読みは成立しない。楊伯峻 1980:2 は「這種人是很少的」と訳しており、「了」は避けられている。すべての「矣」が「了」に等しいとは言えないことは、呂叔湘 1944/1982:271 が早くに注意を促している。このような完了相説でカバーできない用例は先行研究でも言及され、例えば劉承慧 2007 は、話者の主観性を媒介とした完了相マーカーから主観的評価マーカーへの拡張を想定することで、時間性のない用例の説明を試みている。

しかし私は、「矣」を現代語の完了相マーカー「了」に結びつけることが、かえって「矣」の機能の本質を見失う結果を招いているのではないかの疑問を拭うことができない。以下、完了相説そのものが成立し難いことを示したうえで、モダリティの観点から「矣」の機能の説明を試みる。

3. 完了相説の問題点

「矣」には確かに完了相マーカーと解釈し得る例が少なくない。

(8) 南氏生男，……公使共劉視之，則或殺之矣。(『左伝』哀公三年 57-18B)

南孺子に男子が生まれた。……哀公が(大夫の)共劉を派して嬰兒を視察させた

ころ、すでに何者かに殺されていた。

この例では、共劉が現場に到着した時点で、南氏が生んだ男児は既に殺されている。参照時である「共劉視之」以前に発生した出来事「或殺之」が参照時に関連付けられていると解釈すれば、典型的な完了相であると言える。小倉訳が「すでに」という原文にない語を補っていることも、完了相との整合性を物語っている。具体的な特定の事件が描写され、参照時を表す語句が明文化されているという点で、上例 (3) (4) よりも分かりやすい完了相的な用例であろう。このような例は他にもいくつか見つけられる。

(9) 公使陽處父追之，及諸河，則在舟中矣。(『左伝』僖公三十三年 17-16A)

公は陽處父を派して三人を追いかけさせ、黄河の岸で追いついたが、三人はすでに舟に乗っていた。

しかし完了相説は、次の2点から明確に否定される。まず、完了相的な時間認識は「矣」が無くても表現可能である。

(10) 令尹使視郤氏，則有甲焉。(『左伝』昭公二十七年 52-18B)

令尹が郤氏の邸を偵察させると、はたして甲が置かれていた。

参照時である「視郤氏」の時点で、「有甲焉」という出来事が既に実現済みであるという時間構造は、「矣」を伴う例 (8) (9) と全く同じである。次の例では同一時間構造に対応すると見られる文において、「矣」を持つものと持たないものが交互に用いられている。

(11) 齊侯免，求丑父三入三出。……辟女子。女子曰：「君免乎？」曰：「免矣。」曰：「銳司徒免乎？」曰：「免矣。」曰：「苟君與吾父免矣，可若何？」乃奔。(『左伝』成公二年 25-13AB)

脱出に成功した齊侯は、〔身代わりになった〕丑父を求めて、三度、進入、退出をくりかえした。……〔前駆が、道傍の〕女子に道をよけさせると、女子は、「国君は、脱出されたでしょうか」「脱出された」「銳司徒〔武器係〕は脱出したでしょうか」「脱出した」「国君と^{わたくし}吾の父が脱出したのなら、ほかはよろしゅうございます」と言って走り去った。

この例において齊侯と武器係の脱出が実現したかどうかは発話時における焦点の情報である。女子が発した「免乎」という問いかけと、「免矣」という答えにおいて、時間構造に対する認識には違いはないだろう。もし「矣」が完了相をマークしているのであれば、「免矣乎」と言ってしかるべきである。沈玉成 1981:205 は、どちらも「了」を使って「“國君免於禍難了嗎？”“免了”」と訳している。

次に「矣」は、現代語における完了相の文末助詞「了」と異なり、必ずしも参照時における変化の実現を表わさない。⁽¹¹⁾それはとりわけ「美」「大」のような状態動詞との共起において顕著である。

(12) 孟子曰：「牛山之木嘗美矣。(『孟子』告子上 11 下 1A)

牛山は以前は樹木が鬱蒼と生い茂った美しい山であった。……

(13) 華元曰：「……今公室卑，而不能正，吾罪大矣。(『左伝』成公十五年 27-23A)

……しかるに今や公室の地位は低下し、それを立て直すこともできず、^{わたし}吾の罪は

重大である。

例(12)の「美矣」は嘗て美しかったという過去の事実の叙述であって、過去のある参照時まで「美しくなった」という変化の実現ではあり得ない。例(13)の「大矣」は、華元の罪状が過去に増大し、参照時である発話時現在まで持続しているという完了相的な解釈も不可能ではない。しかしこの例で罪が大きい具体例として挙げられているのは「今公室卑、而不能正」という現実であり、叙述の焦点が変化の実現よりも現状確認にあることは明らかである。「美矣」「大矣」のような表現を集めても、「美しくなった」「大きくなった」という変化の実現を確実に表す例はほとんど見つからない。このことは「矣」の機能の中心が現代語の「了」とずれており、「了」との相似性を手掛かりにその機能を完了相とするプーリーブランクらの説が成り立ち難いことを示している。さらに言うと、完了相から話者の主観的評価への拡張という劉承慧 2007 の主張も事実にもそぐわないものであり、むしろ逆に話者の主観的評価というモダリティ的側面が「矣」の中心にあったことを示唆するものと言える。ここから先は、モダリティの観点から「矣」の文法機能の分析を試みる。

4. 上古中国語とモダリティ

モダリティとは、文中において話者が命題に対して表明する心的態度に関する意味範疇を指す。上古中国語のモダリティは、伝統的には「語気」という概念の下で議論されてきた。「矣」や「也」はしばしば「語気助詞」の範疇に分類される。プーリーブランクらの主張は、「矣」や「也」を伝統的な「語気」からアスペクトへと範疇を変更したことで注目を集めたが、本稿の主張はむしろ伝統的な分類に妥当性を認めようとするものである。

モダリティの枠組みとしてしばしば言及されるのが、現実 (realis) と非現実 (irrealis) の対立である。この枠組みを用いて上古中国語の副詞「其」の本質を非現実マーカーであると分析した戸内 2018:101 は、先行研究を援用しつつ両者の概念を以下のようにまとめている。

(14) “irrealis” は話し手が事態を、実現していない、あるいは実体験として実現したと認定できない仮想のものとして捉えたもの。

(15) “realis” は話し手が事態を、実現したもの、実現しつつあるものとして捉えたもの。

現実／非現実の対立を基礎とするモダリティ観が、直接法と接続法の対立を持つヨーロッパ語の叙法の強い影響を受けていることは注意を要する。叙法はおろか形態的な文法表示手段を持たない上古中国語のモダリティ体系は、果してこれと整合的なのか。

現実／非現実の対立から上古中国語を観察すると、まず目を惹くのが、非現実的な事態がごく普通に無標で表現されることである。

①無標の仮定

(16) 天下有道，丘不與易也。(『論語』微子 18-4A)

世界じゅうに道が行われているなら、丘も何も改めようとはしないのだ。

②無標の未来

(17) 鬪伯比曰：「以爲後圖，少師得其君。」(『左伝』桓公六年 6-17A)

「将来のための計画です。少師はそのうち随君の寵を得るようになります」

楊伯峻 1981:110 は、この例には未来時を表す副詞が省略されており、同様の例は少なくないと指摘している。

③無標の意図

(18) 子曰：「道不行，乘桴浮于海。從我者其由與？」(『論語』公治長 5-3A)

道が行われないなら、筏に乗って海に出よう。

④無標の命令

(19) 居！吾語女。(『論語』陽貨 17-4B)

お坐り、わたしがお前に話してあげよう。

Palmer2001:65-68 は、無標の平叙文と有標のモダリティ形式を、基本的に現実／非現実の対立として捉えている。しかしこれは上古中国語には当てはまらない。無論、非現実な事態が無標表現に対応する現象には様々な議論があり、戸内 2018:110 は益岡 2007:150-153 が述べる必須性の高い「強い対立」と、選択性・必須性の低い「弱い対立」という観点をを用いて、「中国語は古今を通して、“realis/irrealis”は義務的にマークしなければならない文法範疇ではな⁽¹⁴⁾い「弱い対立」に位置付ける。しかし後述のように、有標のモダリティ表現が現実と非現実とに跨って用いられることも考え合わせるなら、「弱い対立」であると考えよりも、文法範疇として機能していなかったと考えるべきではないか。中国語は明示的な文法手段の乏しい言語である。乏しい手段をわざわざ弱い対立⁽¹⁵⁾に使うのは合理的ではない。有標表現を使う基準は他⁽¹⁶⁾にあったと考えたい。

本稿で作業的な枠組みとして提示しておきたいのが、無標の断定形式(主観非表示表現)と、有標のモダリティ形式(狭義のモダリティ表現)との対立からなる広義のモダリティ体系である。無標の断定形式は、話者が断定するに足る、真である、一般的に正しいと信じる命題を表す際に用いられる。命題に対する心的態度を表明する必要がない場合や、それを隠蔽する場合に用いられる⁽¹⁷⁾こともある。命題が現実⁽¹⁶⁾に真であるか否かとは無関係である。例(16)のように条件節で断定表現が使われるのは、当該の命題が真である状況を話者が仮構(反実仮想)していることに動機がある。例(17)は当該の命題が真である、もしくは実現することが確実であると話者が思い描いているため、無標で表現されたと考えられる。

有標のモダリティ形式は、命題に対する心的態度を表出する。命題に対する断定を保留するタイプや、命題に対する認識評価を表出するタイプがあると考えられる。断定保留マーカは、命題の真偽に対する判断や、事態の存否に対する判断を保留する場合に用いる。例えば、三村 2020:44 は副詞「蓋」の本質的機能を「発話時に先行する事柄について、真偽判定を行わずに陳述する心的態度を表す」としている。戸内 2018 が非現実マーカとした副詞「其」は、事態の存否に対する断定保留マーカと捉え直すことができる。これに対し認識評価マーカは、命題が表す事態に対する話者の意味づけを付与する⁽¹⁸⁾場合に用いる。文末助詞の「矣」は、「也」とともにこの範疇に入ると仮定

する。以下具体例に基づき解釈を加える。

5. 「矣」のモダリティ機能

5.1 「矣」のモダリティ機能に関する仮説

「矣」は、命題が表示する事態が特定の時空間に確実に存在すること (certainty)、もしくは事態の存在を話者が確信していること (confidence) を主張するモダリティ助詞である。これが、本稿が提示しようとする「矣」の機能の本質である。

ここで言う確実性や確信については、『馬氏文通』以来、「決事理已然之口气」(馬建忠 1898/1983:341)、「表決定」(呂叔湘 1944/1982:270)、「決定語気」(王力:1944/1984:216-217) 等様々な表現で類似のことが言われている。「新状況を報告する陳述の語気」(郭錫良 1989:75) との説や、現時相関性 (current relevance) を機能の中心とする意見もある(姚堯 2015:256)。「矣」の完了相説が成り立たないことを踏まえ、本稿では先行諸説のモダリティ面に焦点を当て、問題となる時空間において事態が確実に存在するという話者の確信的主張を「矣」の本質と捉え、この仮説に基づき「矣」の多義性や用法の広がりの説明したいと考えている。上古中国語にテンスはないため、「矣」は現在、過去、未来のいずれの時空間にも対応可能である。話し手は「矣」を付加することにより、発話時現在の判断として、ある事態が現に存在している、過去に確かに存在していた、未来に確実に存在することを主張するのである。

5.2 発話時現在の時空間に存在する事態

ここで考えなければならないことは、現に存在する事態をあえて「確実に存在する」と主張することに、どのような意味と効果が伴うかということである。興味深い例を2つ挙げる。

(20) 瑕叔盈又以蝥弧登，周麾而呼曰：“君登矣！”鄭師畢登。(『左伝』隱公十一年 4-21B)

こんどは瑕叔盈が蝥弧を持ってよじのぼり、四方に打ち振って、「^{わがきみ}君は登られたぞ」と叫ぶ。鄭軍ことごとく城牆にのぼり、

(21) 楚子登巢車，以望晉軍。子重使大宰伯州犁侍于王後。王曰：「騁而左右，何也？」曰：「召軍吏也。」「皆聚於中軍矣。」曰：「合謀也。」「張幕矣。」曰：「虔卜於先君也。」……(『左伝』成公十六年 28-7B8A)

楚子は楼車に登って、晋軍を遠望した。……王がたずねる。……「全員が中軍にあつまつたぞ。」「相談しているのです。」「幕を張ったぞ。」「先君の位牌の前で卜っているのです。」……

これらの例は話し手が眼前で発生したばかりの出来事を聞き手に伝えているもので、『馬氏文通』以来現代語の「了」に相当すると説明されてきた用法でもあるが、むしろ呂叔湘 1944/1982:264 の「呢」についての次の説明もよく当てはまる。

(22) 「呢」字之表确认，有指示而兼铺张的语气，多用于当前和将然的事实，有「诺，你看」「我告诉你，你信我的话」的神气。……「呢」字是说事实显然，一望而知；

……「呢」字偏于叫別人信服。

確認を表す「呢」は、事態を聞き手に提示し、誇張の語気を兼ねる。目前や将来の事実に用いられることが多く、「ほらごらん」、「言っとくけど、信用しなさい」というニュアンスがある。……「呢」は事実が明らかで一目瞭然であることを述べ、……「呢」は相手に対し信用服従を求める傾向をもつ。

例(20)の瑕叔盈が発した「君登矣」が嘘であることは注意を要する。彼が手にした蝥弧は鄭伯の旗で、「君登矣」と叫ぶことによって、鄭伯が城壁を登り切ったと味方に信じ込ませ、勢いづけようとしたのである。完権 2018:26 は、「嘘に『呢』を用いる意図は、より大きな欺瞞性を得ることにある」と述べている。

例(21)では、楚王は一つ一つ目の前で起こった出来事を伯州犁に伝え、その意味を説明させている。「矣」の使用には、出来事の実在性をクローズアップして聞き手の関心を引き、自分の描写した事実に対する聞き手の思考を活性化させようとする話し手の意図が込められていると考えられる。このような機能はやはり「呢」にも備わっている。完権 2018:24-25 は情報の「⁽¹⁹⁾信拠性(信頼性)」と呼び、信頼性を高めることで聞き手が話し手の発言を重視し、話し手の意図を汲んで聞き手が反応することを期待する働きがあると説明する。

木村 2012 の「呢(NE)」の描写も、「矣」との共通性を示している。

(23) NE は、ある状況が問題の場に〈現然と存在する〉という意味を表す形式であると考えられる。……NE が担う機能は、命題内部、すなわちコトの内側に属する典型的な意味でのアスペクトという時間範疇に属するものであるとは認めがたい。NE は、むしろコトの外側にあつて、コトを話し手にとっての「ここ」あるいは「そこ」というリアルな空間領域に定位する形式であると考えられる。(木村 2012:143-146)

「矣」はまさに、当該の事態が発話の時空間に現然と存在することを主張するものであり、出来事をリアルな実空間に定位するという点において、「呢」との間に共通性が認められるのである。木村 2012 が「呢」の機能を典型的なアスペクトとは認めがたいとする点にも注意が必要である。

このような共通性は、これまで「了」の陰で見過ごされてきたのであるが、本稿は「矣」の機能を単純に現代語の「呢」と同一視しているわけではない。上古と現代とでは、アスペクトやモダリティ、さらに動詞の性質にも体系的、構造的な違いが生じていることは容易に予測される。「呢」にせよ「了」にせよ、「矣」との共通性は体系の違いを踏まえて理解すべきものである。

例えば上の例(20)「君登矣」の現代語訳は「國君登城了」(沈玉成 1981:17)であるが、「了」を「呢」に変えると誤訳になる(殿様は城壁を登っておられます)。現代語は上古と異なり、無標の動詞(「登城」)が限界の(telic)な行為を表さないため、「登城呢」は「城壁を乗り越えた」という完結した状況が現に存在することを表し得ないのである。また木村 2012:145 は、「あつ、雨が降ってる!」のような発見の場面には「呢」は不適切であり、「下雨了」のように変化を表す「了」を用いなければならないことを指摘

している。「君登矣」は明らかに瑕叔盈の発見として伝えており、そもそも現代語では「呢」の使用に馴染まない。

次に状態動詞に「矣」が付く例を挙げる。

(24) 王曰：「余殺人子多矣，能無及此乎？」（『左伝』昭公十三年 46-6A）

「これまで余は人の子をたくさん殺して来た。こうならざるを得ぬなあ。」

(25) 叔孫穆子曰：「楚公子美矣，君哉！」（『左伝』昭公元年 41-6A）

叔孫穆子（叔孫豹）が、「楚の公子は立派だ。まるで国君だな」と言うとき、

例 (24) は自分の子供たちが殺されたことを知った楚の靈王の言葉である。自分が人の子をたくさん殺してきたことをまぎれもない現実と受け止め、自分も同じ目に合うことが当然の報いであると認めているのである。例 (25) においても、目の前にいる楚の公子が立派であることをまぎれもない事実として提示するのが「矣」である。状態動詞が表す対象の属性は、同時に話者の対象に対する主観的な評価を兼ねる。「矣」はその評価にリアリティを付与する効果を持つ。上述した通り、現代中国語の文末の「了」が、「脸红了」（顔が赤らんだ）のように参照時において変化が実現済みであることを表すのに対し、「矣」は基本的に変化の既実現を表さない。例 (24) にしても例 (25) にしても発話時における事態の实在を主張しているのであって、そのような変化があったことを意味してはいない。いわゆる主観的評価とされる用法は完了相からの拡張ではなく、状況の存在を主張する本来の機能と位置付けるのが妥当である。⁽²⁰⁾

5.3 過去に存在した事態

過去に存在した事態は無標で表現することが可能だが、「矣」を付加することにより、確かな事実として存在したことを主張する。それは単なる事実の描写ではなく、そのような主張を通して聞き手への働きかけの意図が込められることがある。例を一つ挙げる。

(26) 王將嫁季芊，季芊辭曰：「所以爲女子，遠丈夫也。鍾建負我矣。」以妻鍾建，以爲樂尹。（『左伝』定公五年 55-4A）

王が〔妹の〕季芊を嫁がせようとするとき、季芊は、「女子は丈夫^{とのがた}から身を遠ざけなければならぬのに、鍾建は我^{じぶん}を背負いました」とことわった。そこで鍾建に嫁がせ、これを樂尹に任命した。

この例では、話し手の季芊は鍾建と接触したことをまぎれもない事実として提示することにより、彼と結婚するしか道がないことを楚王に説得しているのである。ちなみに「鍾建負我矣」は話し手の実体験である。現実／非現実の対立を導入するなら、「矣」も無標の形式と同様に双方に跨っていることになる。この範疇が上古中国語において有効ではないことを物語っている。

呂叔湘 1944/1982:324 は、「矣」でマークされた句が時に逆接を導くことを指摘している。

(27) 徐吾犯之妹美，公孫楚聘之矣，公孫黑又使强委禽焉。（『左伝』昭公元年 41-14B）

鄭の徐吾犯の妹は美人で、公孫楚（子南）が結婚を申し入れていたところ、公孫黒

(子皙)の方も無理やり結納の雁をこれに送らせた。
前後に方向性の異なる句を配置すれば無標でも逆接表現は成立するが、前件に「矣」を加えて出来事の実在性を前面に出し、コントラストを際立たせる表現と考えられる。

5.4 未然の事態

未然の事態を「矣」でマークすると、今後発生する事態に対する話し手の確信を表す。上例(17)のように、未然の事態を無標の断定形式で表現した場合でも同様の認識⁽²¹⁾を表現することは可能だが、「矣」は話し手の主観を前面に押し出す。

(28) 宋人使樂嬰齊告急于晉，晉侯欲救之。……乃止。使解揚如宋，使無降楚，曰：「晉師悉起，將至矣。」(『左伝』宣公十五年 24-8B)

宋の人は樂嬰齊を派して、晋に急を告げさせた。晋公(景公)が救援しようとする、……そこで出兵を取りやめ、解揚を宋に行かせて、楚に降伏せぬよう、「晋軍は出動し、まもなく到着する」と伝えさせようとした。

例(28)において、晋が解揚にやらせようとしたのは、「晉師悉起」という嘘の情報に基づき、晋の援軍の到着という未然の事態をより確実なものとして伝えさせ、宋の楚への降伏を防ごうとしたことである。ちなみに「矣」と共起している「將」は、単純な近未来というよりは、予定された行為や事態のマークに使われることも多く、事態生起の確実性を表す「矣」とは相性が良い。⁽²²⁾

上古中国語に頻出する「必…矣」も、話し手の確信を表す副詞「必」をさらに強調した表現と言える。

(29) 虢公敗戎於桑田。晉卜偃曰：「虢必亡矣。亡下陽不懼，而又有功，是天奪之鑿，而益其疾也。」(『左伝』僖公二年 12-7B)

虢公が戎を桑田で破ると、晋の卜偃は言った。「虢は必ず亡びる。下陽を失っても心配せず、かえって戦果をあげた。これは天が自らを映す鏡を虢から奪って、その〔驕りの〕罪を重くさせているのだ。

例(28)にしても(29)にしても、前後に主張の根拠となる表現を伴っている。本来確実性のない未来の事態の確実性を主張するのであるから、話者の心理としては主張の根拠を述べる必要を感じるからである。したがって「矣」自体に何らかの証拠性モダリティがあるとは考えにくい。

「矣」の頻出パターンとしてよく知られる結果節の用法についても、条件の実現が結果の実現を必ずもたらすという話し手の主観的判断を反映する。

(30) 子文曰：「必殺之！……弗殺，必滅若敖氏矣。」(『左伝』宣公四年 21-21A)

殺さぬと、きつとわれら若敖氏を滅ぼすことになる。

馬建忠 1898/1993:345 は、「矣」は「已然の語気を表し」(決已然之口氣)、「結果事態が判明するのは後のことだが、事態の感触はそれに先立って露見している」(蓋效之發見，有待於後，効之感応已露於先矣)と説明している。

5.5 「矣」と断定保留マーカー「其」「蓋」との共起

「矣」が当該の事態が問題となる時空間に確実に存在することを主張する一方、断定保留マーカーの「其」や「蓋」は、事態の存否や真偽に対する判断を回避する。一見相反する両者が共起する例も散見するが、いかなる意味を表わしているのだろうか。

(31) 子曰：「《詩》云：『惟彼二國，其政不獲；惟此四國，爰究爰度』，其秦穆之謂矣。」（『左伝』文公四年 18-20A）

君子の評。『詩』に、「昔、かの二国（夏・殷）は、その政、人心を失へり。今、この四方の国は、これに鑑み自ら謀る。」とあるのは、秦の穆公のことであろう。

この「其」の使用は、陳前瑞・王継紅 2018:556 が指摘したように、評価対象の秦の穆公と『詩』（『詩経』大雅・皇矣）との時間的乖離に関係しよう。話者である君子は、数百年前のことを描く詩と穆公とを直に結びつけることを「其」によって回避しつつ、この詩の内容が秦の穆公に確実に当てはまることを「矣」によって主張していると考えられる。断定保留の「其」の付加は「矣」が主張する確実性を引き算する方向に作用する。

次の例は反実仮想文である。

(32) 子曰：「……微管仲，吾其被髮左衽矣！」（『論語』憲問 14-9B）

管仲がいなければ、わたしたちは散ばら髪で襟を左まえにし〔た野蛮な風俗になっ〕ていたろう。

孔子は管仲が居なければ蛮人の服装をしていたに違いないことを確信しているが、現実の世界にはあり得ない空想であるために、「其」によって断定を避けたと解釈される。

次に挙げるのは「矣」が疑問を表す「乎」や、断定保留の「蓋」と共起する例である。

(33) 子曰：「我未見好仁者，惡不仁者。……有能一日用其力於仁矣乎？我未見力不足者。蓋有之矣，我未之見也。」（『論語』里仁 4-2B）

……もしよく一日のあいだでも、その力を仁のために尽くすものがあつたとしてごらん、力の足りないものなど、わたくしは見たことがない。あるいは〔そうした人も〕いるかも知れないが、わたくしはまだ見たことがないのだ。

「有能一日用其力於仁矣乎」を金谷 1963 は上の通り仮定文で訳しているが、これは疑問文であろう。「一日くらい仁に尽力できる人は確かにいる」という判断を示したうえで、「乎」を加えて自問自答しているのである。直後に「我未見力不足者」と言っており、孔子の答えは肯定である。「蓋有之矣」については、三村 2020:85 は「実は確信しているが、直接見たわけではなく確証がないので言語表現としては確信度の低さを表す「蓋」を使った、等の説明も可能だろう」と述べている。真偽判断の留保と事態の実在性の主張とを組み合わせた複雑なニュアンスが表出されているのである。

5.6 「矣」と完了相

5.6.1 「矣」のモダリティ機能と完了相との関係

ここまで「矣」は事態の確実性を主張するモダリティ助詞であったとの仮説を示した上で、それに基づき意味の広がり解釈してきた。しかし上述の通り、「矣」には完了相との解釈を許容する用例が一定数見られることも事実である。ここではその理由を、

本稿が提示したモダリティ説に基づき説明したい。上例 (8) (9) の他、次の例も完了相の読みが可能である。

(34) 宣子驟諫，公患之，使鉏臯賊之。晨往，寢門闢矣，盛服將朝。(『左伝』宣公二年 21-10A)

趙宣子(趙盾)がしばしば諫めるので、公はこれを嫌い、鉏臯に暗殺を命じた。早朝、鉏臯が出向くと、寢室の門は開け放たれ、礼服を整えて参内にでかけるところ。鉏臯が趙盾の家に着いた時、「寢門闢」という状況が彼の眼前に展開し、「矣」でマークされた「寢門闢」という事態が「晨往」という参照時間の直後に結び付けられている点は、まさに完了相の捉え方と一致する。上述の通り、「矣」は当該の時空間に事態が確実に存在することを主張するが、そのような事態は確実に参照時に先立って存在する。例 (20) (21) のように発話時に展開される事態も同様である。この点で「矣」は完了相的解釈と両立する。これが、先行研究が「矣」の機能を完了相と誤認した原因である。

本稿の議論の範囲を超えるが、「矣」の機能は完了相から評価のモダリティへと拡張したのではなく、通説とは逆に評価のモダリティからアスペクトへ拡張する契機を内在していた可能性も考えられよう。徐晶凝 2008:346-365 は、モダリティとアスペクトとは相互に転化し得ることを論じつつ、本稿で「矣」と類似の機能を持つとした現代語の「呢」に関して、モダリティ領域からアスペクト領域へと拡張し始めていることを指摘している。

(23)

5.6.2 構文理解における問題点

「矣」の完了相説には、文の構造に対する誤解によるものも含まれている。劉承慧 2007:749 は次の 2 例を完了相と見る。

(35) 樂祁曰：「與之。如是，魯君必出。政在季氏三世矣，魯君喪政四公矣。(『左伝』昭公二十五年 51-7A)

政権は季氏的手中にあること〔文子・武子・平子と〕三代にわたり、魯の国君が政権を失うこと〔宣・成・襄・昭の〕四公に及んでいます。

(36) 祁午謂趙文子曰：「……子相晉國，以爲盟主，於今七年矣。(『左伝』昭公元年 41-4B)

あなたは晋国の執政となられて、盟主たること、ここに七年。

例 (35) の「三世」「四公」はそれぞれ「政在季氏」「魯君喪政」の(参照時までの)持続時間であり、「矣」は過去に始まった事態が現在まで持続することを表す完了相の持続用法であるという。しかしこの主張は、「矣」がマークする動詞句が「政在季氏」「魯君喪政」であるとの誤解に原因がある。同様に完了相の持続用法とされる例 (36) では「矣」との間に「於今」という前置詞フレーズが入っていることから、「矣」は当該動詞句と直接の構文関係を持たず、時間述語「七年」をマークしていることが明らかである。この例の「矣」は、趙文子が晋の執政となり盟主となってから、現時点で七年という時間が存在することを確認しており、「相晉國以為盟主」の持続をマークしているのではない。同様に例 (35) の「矣」がマークするのは「三世」「四公」という時間経

過の実在性であり、「政在季氏」「魯君喪政」の持続性ではない。完了相の持続用法との解釈は成立しない。

6. 終わりに

本稿では、「矣」の完了相説は成り立たず、その本質的機能は特定の時空間において事態が確実に存在することを主張するモダリティ助詞であることを論じてきた。本稿を終えるに当たり、今後の課題として以下の3点に言及しておきたい。

一つ目は上古中国語におけるモダリティ体系の構築である。本稿では、現実／非現実の対立が上古中国語と整合性を持たないことを指摘した上で、作業的枠組みとして無標の断定形式／有標のモダリティ形式を提示した。個々の言語におけるモダリティの多様性についてのPalmer2001:2の指摘を踏まえ、文法的資源に乏しい中国語における有標性を重く見て、それにふさわしい体系の構築が必要と考えたのである。初歩的な試みとして「矣」を取り上げたのだが、モダリティに関する語は多く、今後さらなる検証が必要である。

二つ目は、本稿冒頭で触れた「矣」と「也」との違いを上古中国語のモダリティ体系の中でどう位置付けるかという問題である。注(19)で簡単に触れたように、「矣」が発話時を含む特定の時空間における事態の確実性を主張するのに対し、「也」は時空間に縛られない普遍的な確実性を主張するとの違いが、先行研究や試験的な調査から予測される。例(1)について付言すると、恒久的な不存在を含意する「未有」は、普遍性志向を持つ「也」との相性が良いと考えられる。他に論点も多く、「也」の詳細は場を改めて論じたい。

三つ目は、モダリティと深い関係を持つアスペクト体系およびその歴史の変遷の解明である。従来の研究は有標表現のみを取り上げ、既存の理論に当てはめて解釈することにはほぼ終始し、上古においてどのようなアスペクトが範疇として確立していたのかという根本的問題は手つかずのままである。「矣」の完了相説を否定した本稿の議論が、完了相の成立をはじめとする中国語のアスペクトの歴史的な解明に向けて、ささやかな問題提起となれば幸いである。

[引用文献一覧]

曹銀晶『「也」、「矣」、「已」的功能及其演变』、花木蘭文化出版社、2016年。

陳前瑞・王繼紅「《左伝》中“矣”的多功能性的量化分析」、『中国語文』2018年第5期。

郭錫良「先秦語氣詞新探(二)」、『古漢語研究』1989年第1期。

洪波「從《左伝》看先秦漢語“也”“矣”的語氣功能差異」、吳福祥、汪国勝主編『語法化與語法研究(七)』、商務印書館、2015年。

洪波・王雪燕「語言接觸視角下的上古漢語形態句法問題——兼論“也”“矣”的來源」、『古漢語研究』2021年第1期。

李佐豊『古代漢語語法學』、商務印書館、2004年。

梁銀峰「關於上古漢語語氣詞“也”動態用法的例証辨析」、『語言研究集刊』第26輯、上海辭書出版

社、2020年。

劉承慧「先秦「矣」的功能及其分化」、《語言暨語言學》第八卷第三期、中央研究院語言學研究所、2007年。

劉文典『淮南鴻烈集解』、中華書局、1989年。

呂叔湘『中國文法要略』、商務印書館、1982年。もと1944年。

馬建忠『馬氏文通』、商務印書館、1983年。もと1898年。

梅廣『上古漢語語法綱要』、三民書局、2015年。

沈玉成『左伝訳文』、中華書局、1981年。

完権「信抛力：“呢”的交互主観性」、《語言科学》2018年第1期。

王力『中國語法理論』、山東教育出版社、1984年。もと1944年。

魏培泉「古漢語時体標記的語序類型与演變」、《語言暨語言學》第十六卷第二期、中央研究院語言學研究所、2015年。

徐晶凝『現代漢語話語情態研究』、崑崙出版社、2008年。

楊伯峻『論語訳注』、中華書局、1980年12月。

楊伯峻『春秋左伝注』、中華書局、1981年。

楊萌萌「“主之謂”結構的句法」、《中國語文》2019年第3期。

姚堯「句末助詞“矣”時、体、情態意義的轉換與演變」、《歷史語言學研究》第九輯、商務印書館、2015年。

鄭路『《左伝》時間範疇研究』、知識產權出版社、2013年。

中国社会科学院語言研究所古代漢語研究室『古代漢語虚詞詞典』、商務印書館、1999年。

太田辰夫『中國語歴史文法』、江南書院、1958年。

小倉芳彦『春秋左氏伝』(上・中・下)、岩波書店、1988-1989年。

金谷治『論語』、岩波書店、1963年。

木村英樹『中國語文法の意味とカタチ——「虚」的意味の形態化と構造化に関する研究——』、白帝社、2012年。

小林勝人『孟子』、岩波書店、1972年。

戸内俊介『先秦の機能語の史的発展』、研文出版、2018年。

三村一貴「上古漢語のモダリティマーカー「蓋」について」、《中國語学》267号、日本中国語学会、2020年。

宮本徹・松江崇『漢文の読み方—原典読解の基礎』、放送大学教育振興会、2019年。

益岡隆志『日本語モダリティ探究』、くろしお出版、2007年。

山田大輔「上中古漢語のテキストにおける〈逆順提示〉を担う形式の変遷について—文末の“矣”と時間副詞“已”を中心に」、《中國語学》263号、日本中国語学会、2016年。

山田大輔「上古漢語の副詞“將”の機能について」『饕餮』第26号、2018年。

Bybee, Joan, Perkins, Revere and Pagliuca, William. 1994. *The evolution of grammar: Tense, aspect, and modality in the languages of the world*, Chicago and London: The University of Chicago Press.

Chao, Yuen Ren. 1968. *A Grammar of Spoken Chinese*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

Lin zi-yu1991. The Development of Grammatical Markers in Archaic Chinese and Han Chinese, Doctoral Dissertation, State University of New York, Ann Arbor: University Microfilms International.

Palmer, F.R. 2001. *Mood and Modality* (2nd ed.), Cambridge University Press.

Pulleyblank, Edwin G. 1994. Aspects of Aspect in Classical Chinese, 高思曼・何樂士主編『第一屆國際先秦漢語語法研討會論文集』、岳麓書社、1994年。

Pulleyblank, Edwin G. 1995. *Outline of Classical Chinese Grammar*, Vancouver: UBC Press,.

Wang, Cheng2019: A Preliminary Investigation of Aspectual Features of Motion Verbs in Classical Chinese, Meistererst, Barbara (ed.), *New Perspectives on Aspect and Modality in Chinese Historical Linguistics*, Peking University Press.

注

- (1) 十三経からの引用は、嘉慶二十年江西南昌府学開彫重栞『十三経注疏』（芸文印書館、1982年）による。
- (2) 引用文の校訂は、劉文典1989:577に引く俞樾の説による。なお俞樾は『文字』によって「之與矣」3字を衍文とするが、段玉裁『説文解字注』矢部「矣」には「淮南説矣與也二字不同」とある。
- (3) 定州本は残缺も多いため、皇侃本に見える13例のうち、「也已矣」でないことが確定できるのは3例である。また上博楚簡の孔子語録文献に「也已矣」は存在しないという。
- (4) “矣”字者，所以決事理已然之口氣也。已然之口氣，俗間所謂“了”字也。凡“矣”字之助句讀也，皆可以“了”字解之。
- (5) (一) 助已然语气
(A) 说明某件事情、某种情况已经出现、形成或某种动作已经完成、实现。句中有时有“既”、“已”等副词与之配合。可译为“了”。(中国社会科学院語言研究所古代漢語研究室1999:716)
- (6) Lin1991が先に完了相説を唱えているが、あまり知られていない。
- (7) The Discourse Motivation for the Perfect Aspect: The Mandarin Particle 了, Paul J. Hopper, ed. *Tense-Aspect: between Semantics and Pragmatics*, John Benjamins Publishing Company.
- (8) 以上はChao1968:798を指す。起動相として挙げているのは「下雨了」(雨だ)のような例である。
- (9) In Li, Thompson and Thompson (1982) they go further and suggest that 了 serves as a marker of Perfect (as opposed to Perfective) Aspect. That is, it does not simply look on an action as a complete, undivided whole like the perfective in Russian or the aorist in Ancient Greek but relates its completion to the time of utterance or some other reference time, like that perfect tenses in Ancient Greek or English. Chao also includes ‘completed action as of the present’ as one of the meanings of 了. ‘Change of state’, listed by Li and Thompson as the first subcategory among the meanings of 了 and commonly found as its definition in teaching grammar of modern Chinese, readily fits under the concept of perfect aspect, as does ‘inchoative’, the first meaning listed by Chao. In both cases the focus is on the new situation that arises out of the

completion of previous situation.

- (10) 魏培泉 2015、Wang 2019、楊萌萌 2019 等。曹銀晶 2016:74 は賛否を保留している。
- (11) 現代中国語の文末助詞「了」の機能については木村 2012:140-143 を参照。
- (12) 「老矣」には「年を取りました」のように変化の実現と解釈できる用例もしばしば見つかる。「老」は「美」や「大」と異なり、時間とともに進行する不可逆的な変化を含意する。この点で完了相的解釈と親和性を持つが、現状認識との解釈も問題なく成り立つ。
- (13) 中国語の文法用語としては、「modality」には「情態」が充てられ、「語気」は「mood」の訳語として用いられる。しかし叙法 (mood) を持たない上古中国語において、伝統的用語「語気」が表すのは、実質的にはモダリティ (法性) にほぼ等しい。
- (14) 現実／非現実の対立を持つ言語において、命令を現実に位置付けるか非現実に位置付けるかは言語によって異なり、命令のポライトネスに関わる場合もある。具体例は Palmer 2001:179 以下を参照。
- (15) 現代中国語においても、現実／非現実に関わる文法現象は見られるものの、両者の間にはシステムティックな対立は見られず、必ずしも現代中国語のモダリティ体系に適合しないという意見もある。徐晶凝 2008:49-57 を参照。
- (16) 木村 2012: i に端的な指摘がある。
- (17) Bybee, Perkins, Pagliuca 1994:236-240 は、現実／非現実の二元的対立の通言語的な有効性に疑問を呈しつつ、叙法が関連するのは真実や事実の領域ではなく、断定と非断定の領域であることを示唆する相当の証拠があると述べている (Considerable evidence suggests that it is not the domain of truth or fact that is the relevant domain for mood, but rather the domain of assertion and non-assertion that is relevant)。
- (18) 戸内 2018:118 は「『其』の有無は、断定 (assertion) 対非断定 (non-assertion) の対立を構成している」と述べている。「其」の機能を断定保留と捉え直すことは、戸内 2018 の分析と矛盾しない。
- (19) 本例に付言すると、楚王の問いに対する伯州犁の答えがすべて「也」で結ばれていることは興味深い。これらは敵軍の現実の行為を描写しているように見えながら、実は楚王が描写した出来事に対して意味付けを行っているのである。この点では属性表現に近い。特定の時空間における実在性を強調する「矣」に対し、「也」が時空間に縛られない普遍性、恒常性と親和的であることを示唆している。ちなみに呂叔湘 1944/1982:274 は、「也」の特徴を、時間性を持たず静的であると捉え、動的な「矣」に対置させている。
- (20) 李佐豊 2004:230 は、「矣」と共起する動詞は、主観的認識に関わるものと存在に関わるものが半数以上を占めることを指摘している。
- (21) 馬建忠 1898/1983:346 に、未来の事に「矣」を用いるのは、事が既に決まってい変化はないことを意味するとの趣旨が記されている。
- (22) 山田 2018:65 は未来の「將」をアスペクト副詞と捉え、直前相 (参照時において動詞 (句) の表す事態の発生・実現に向けて状況が動いている段階 (直前の段階) にあること) を表すとす。
- (23) この点については台湾大学・巫雪如氏の示教を得た。太田 1958:387-388 は、唐五代に「動作・状態の到達または実現」を表す「也」の前身を「矣」と推定する。但し「也」自身の発展とする異論もある。梁銀峰 2020 等を参照。